
チート主人公はお呼びでないっ！

グリフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート主人公はお呼びでないっ！

【NZコード】

N1859P

【作者名】

グリフ

【あらすじ】

至つて平凡な女子高生・高塚千里。

そんな彼女は魔王として異世界に召喚されてしまった。
元の世界に戻る条件は勇者を倒すこと。

彼女を召喚した魔法使いは言つ。

「勇者は君と同じ世界からやつてきた男でチート能力者だけれど、
君にはそんな能力一切ないから頑張ってね」

な
ん
で
す
と
！
？

凡
人
が
チ
ー
ト
に
ど
う
や
つ
て
立
ち
向
か
え
と
！
？

そ
ん
な
剣
と
魔
法
の
世
界
の
異
世
界
召
喚
フ
ァ
ン
タ
ジ
ー
。

物語の始まり

私は高塚千里。

花の女子高生。

成績・運動能力・美醜、すべて人並みの一般人。

そんな私は異世界に召喚されちゃいました

しかも勇者とか伝説の巫女とかそんなのじゃなくって魔王としてだよ

ーって、なんじゃそりゃああーー！

そりや、私も剣と魔法のファンタジーな世界にはちょっとばかし憧れる年頃ですけど、魔王つて…いや、でもそういう設定の異世界召喚小説読んだことあるな…

ところが「一番煎じかよー！」

ーって、問題点はそんなことじやない。

私を魔王として召喚した意地の悪そうな顔の魔法使いは言ひ。

「君には勇者を殺してほしいんだ」

うん。魔王だものね。

女子高生に人殺しを頼むなんて流石魔界ね！

ぶつ飛んでるわ。

「殺さないと君は元の世界に帰れないからそのつもりでいてね」

うん。なんとなくそう脅される気がしてた。

デット・オア・アライヴ。

「ちなみに勇者は君と同じ世界からやつてきた男でチート能力者だけれど、君にはそんな能力一切ないから頑張ってね」

な ん で す と ! ?

凡人がチートにどうやって立ち向かえと！？

「チートなんてつまらない。そんなの僕は認めない。だから君を呼んだんだ」

あえて私を…? どういうこと?

私がそんなことを思っていたら、魔法使いはグニャリと顔を歪めて笑った。

「凡人で脇役の君がチートな主人公の勇者を殺すのが面白いんだよ」

こうして、私の異世界魔王（凡人）生活が始まった。

物語の始まり（後書き）

初めて投稿します。

書ききれるかわかりませんが、よろしくお願いします。

妥協する凡人

「一といふわけで魔王様。勇者を殺しに行つてきても
「それは全力で回避したい今日この頃です」

高塚千里。「ごく普通の女子高生。
異世界に魔王として召喚されたけれど、能力皆無。
そして敵はチート勇者。

どうしろというんだ。

ていうか、殺人なんてしたくない。

「なんてワガママな魔王様」

「ワガママなのかしら? 殺人したくないのがワガママなのかしら? -
?」

私を呼び出した魔法使い...名前はコースさんといひらしい。
年は20代半ばといったところかしら?

黒い重そうなローブに身を包んだその姿は魔法使いといつより死神
に近い。

「仕方ない。殺すのはいいよ。せめて倒してほしいんだ」

「倒す?」

「我が物顔でこの世界の頂点にいるあの男をギャフンと言わせてよ
「うーん。それくらいなら...」

なんとかできなくもない?

会つたこともない人にギャフンと言わせることを承諾する私...
まあ、元の世界に戻るためだ。仕方ない。

「とにかく、私は呼び出されたばかりでこの世界がどうこいつもの
かさっぱりなの。できれば説明してほしいんだけど」

「いいよ。うんうん。魔王様が前向きになってくれて嬉しいな」

笑顔が大変胡散臭い…

あまり信用できなさそうなタイプだ。

しかし、カースさんしか頼る相手がないこの現状。

「まずは魔界を案内しようか」

カースさんが歩き出したので私はその後についていった。

「どうやら私が召喚されたのは魔王城という魔界で一番豪華な建物らしい。
…けれど

「蜘蛛の巣だらけ…」

「ひどいでしょ？まあ、ここ数年誰も住んでなかつたからね」

そう。この魔王城は大変豪華なつくりだけれど、人がいない為、かなり廃れていた。

「どうして誰も住んでないの？」

「魔王が勇者に殺されたからだよ」

「……」

「ああ。そんな顔しないでいいよ。魔王は魔王でかなりやりたい放題だつたからね。殺されて当然な部分あつたよ」

「でも…」

「この世界はそういう世界なんだよ、魔王様」

なにも殺さなくとも良かつたんじゃないだろうか？

チートと呼ばれる勇者なら、なおむし。

私が甘いんだろ？

凡人の私には思いもよらない考えがあつて、勇者は魔王を殺したのだろうか？

わからない。

ギィィィィ

重そうな扉がひとりでに開く。

そして私は初めて魔界といつもの田舎にした。

「…寂しい」

思わずそんな言葉がこぼれた。

魔界は、とても寂しそうな所だった。

魔界は、寂しい場所。

それが私の第一印象だ。

元の世界のスラム街が私の魔界のイメージだったのだけれど、それよりも戦の後のような光景と言つ方がしつくりくる。数少ない道行く魔界の住人は田が虚ろ。

整備されてたであろう町並みはボロボロで悲惨だ。

「これも、勇者の仕業なの？」

「そうだよ。ほとんどの魔界人は人間に無理やり契約させられ、こき使われているから魔界にはあまりいないんだ。今魔界にいるのは『ぐく一部の者だけ』

「……」

あまりいい気分ではない。

例え勇者のほうが正義があつて、魔王がその世界の住人が悪かつたにしてもだ。

やられたからやり返した。そんな感じがする。

それではまたやり返され、やり返し、やり返され…

無限の負のループが続くんじゃないだろうか。

勇者はそんな事は考えないの？

それとも、そこまでの権限はないのかしら？

私は勇者をギャフンと言わせる前に、一度彼とちゃんと話すべきだと思つた。

まあ、その前に私がこの世界を知らないとね。

「カースさん、魔界にいる一部の者に会いたんだけど

「魔王様が会いたいならそうすれば？」

「会つてくれるかしら？」

「さあね」

随分適當な返事じゃないの。

私を召喚したくせにイマイチやる氣を感じないんだけどこの男。

「僕が勝手に魔王様を呼び出して、勝手に魔王に就任させたからね。みんな君の事認めてないから会つてくれない人とか多いと思うよ」

「な……なんですって！？」

「下手したら返り討ちに会うかもね。魔王様殺して自分が魔王に成り代わろうとするかもしねり」

「んな――――――!?」

なんというアウェー。

凡人で能力皆無だけど腐つても魔王なのに私。勇者倒す前に味方に殺される！

これがゲームの世界なら私はやり込み要素要因の主人公よ！

『千里でレベル・デスハードをプレイしてみました』とかそんなタイトルで実況動画が投稿されるのよ！

「頑張つてね魔王様」

魔法使い・カースはこれまた意地の悪そうな笑顔でニタリと笑った。

……つていうか、あなたは全く私を守る気ないのね、カースさん。

基本的に現在魔界に残っている魔界人の種類は二つ。

- 1、弱い能力しかなく、あまり呼び出されない。
- 2、強すぎて呼び出しできる契約を結ばれていない。

私が会うべきは2の強い者たちだという。

というのも、弱い能力しかない者たちは基本的に知能が弱く、しゃべることが困難だからだ。

「でも怖い！チート勇者が契約結べなかつた人たち相手にお話するなんて！一瞬で殺されるかもしれないのにっ！」

「そうだね。魔王様なんて瞬殺だろうね」

「ひいいい！」

「ははは。でも、魔王様は今魔界の誰に会つても危険度は同じだよ。なにせ凡人なんだから」

「そ、そりやこの魔界の人たち誰にも勝てない自信はあるけど……」

「勇者が契約できない強い魔界人でも、魔界一弱い魔界人相手でも危険なことには変わりないんだ」

「……」

「だから、落ち着いたほうがいいよ
落ち着けるかあああ！！」

そんなわけで今私と案内人力ースは一人の魔界人の住処の前に突っ立つている。

禍々しい雰囲気の真っ黒な家だ。

正直氣味悪い。

「ど、どなたが住んでいるの？」

「知りたいの？」

「そりやあね」

聞きたくないけれど、聞かないで会う方がもつと嫌だ。

「なら、教えてあげる。……ここに住んでいるのは悪魔だよ」

魔界家庭訪問～悪魔アモン編～

「ああああ、惡魔あ！？」

悪魔と言えは、あの悪魔でしょ!!?

蝶蛹みたいな翼が背中は生えて、角がある列膚な怪物の……」
どうしよう。見たとたん氣を失う自信がある。

「そう、悪魔アモンちせん」

「やう。可憐こ子だよ」

女の子なの?

可愛いということは、幼い子なのかもしれない。
それなら大丈夫かも。ちょっと安心。

「アモンちゃん――ん！遊びに来たよ――っ！」

あるべきだ。」

家のなかから足音がする。

バーン！

「ミスタークース。私の名前をちゃんと付けで呼ぶのはよせ。貴殿は本当に人が嫌がることをするのだな」

家の中から出てきたのは、
持つた人物だった。
女の子ではなく……梟の頭と人間の胴体

ああ、駄目よ千里。悲鳴をあげて氣を失いたいけど耐えるのよ…！

元の世界に帰るために、元の世界に帰るために、元の世界に帰るた

めに（暗示中）

ほら、カースさんが言つてたとおり、鳥の頭が可愛く見えない」と
もないわ。（必死に自己暗示中）

私がそんなことを考えていたらアモンさんと田代が合つた。

「なんだこの人間は。貴殿の獲物か？」

え、獲物つて…

私が引きつづいてるとカースさんが否定してくれた。

「ううん。違うよ。それには人間を捕らえるのは勇者法で禁止されて
るだろ？」「

え、勇者法…？

ゆ、勇者法…？

なにそれ、ダサイ。

「それもそうだな。では、何故？」

「ははは。聞いて体中に鳥肌立ててよね」

「もつたいぶるな」

「彼女は僕が召喚した新しい魔王様だよ」

「……どうも」

「新しい…魔王だと？この人間が？」

アモンさんの丸くて大きな目が私を見る。

品定めをするように、じりりと見られて全身から冷や汗がドバッつ
と流れ。

鳥に狙われる小動物つてこんな気持ちなのだろうか。

「見たところ、何も力もなによつだが?」

「そうだよ」

「何故? 貴殿なら、勇者のような力を持つた人間を呼び出せただろうに」

「わざとだよ」

どや顔で答えるカースさん。何がそんなに楽しいんだ。
はあーーー…とため息をつくアモンさん。

アモンさんは見た目とは裏腹に、意外にも話せる人(?)のようだ。

「貴殿も災難だな」

「はは。 そうですね」

私は言われた言葉を否定しなかった。
事実だし。

「だが、私は貴殿を魔王とは認めない。私にとっての魔王はあの方だけだ」

「あの方?」

「先代の魔王だよ。魔王様と違つてすっごく強かつたんだ」

カースさん、一言余計だ。

私が脳内で突つ込みを入れていたら、アモンさんが私に手を差し伸べた。

まるでダンスを誘つかのような優雅な仕草で、彼は言葉をつむいだ。

「というわけで、死んでくれ」

魔界家庭訪問～悪魔アモン編～

「え！？ええええ！？死！？死ですか！？」

「そうだ。私はの方以外の魔王など認めない。貴殿は邪魔だ」「じゃ、邪魔つて」

「そもそも、人間で、しかも何も能力を持たない凡人に魔王が勤まるわけがない」

もつともな意見です。激しく同意します。
けれど、だからって死ねつてひどくない？

これだから悪魔はつ！

「ははは。面白くなつてきたね」
「ちつとも面白い！」

カースさんは私を助けそつなそぶりを全く見せない。
うん。なんとなくそんな気がしてた。
アモンさんは構え、戦闘態勢に入る。
みなぎる殺氣が私に突き刺さる。

ほ、本格的にピンチ！

「ア、アモンさんは先代の魔王様のこと好きなんですね。どんなところが好きだつたんですか？」

とりあえず会話をして気を紛らわせようとすると
私の意図を知つてか知らずか、アモンさんは答えてくれた。

「圧倒的な魔力だ。あの方の魔力は素晴らしいかった」「魔力？魔力があるから好きなんですか？」

「人間にはわからない感覚だろうな。魔界人は強い者が好きなのだ。
強い者が魔王なのだ」

「へー」

人柄とか政治的手腕とかそういうのじゃないんだ。
確かにそれはわからない感覚だなあ。

「でも、どうしてそんなに強い先代が勇者に殺されたんですか？勇
者の方が魔力が強かつたんですか？」

「貴殿は何もミスター カースから聞いてないのだな。まあいい。私
が教えてしんぜよう。の方の方が魔力は強かつた。しかし、勇者
はある特殊なスキルがあつた」

「スキル？」

「魔力を使う魔術とは別のものだよ」

私の疑問にカースさんが説明をつけてくれる。

それによるとスキルとは体質のようなもので、本人が望む望まない
にかかわらず自動的に発動してしまう能力らしい。

スキルがある者は人間でも魔界人でも稀なのだとか。

「勇者のスキルは魔術反射。ありとあらゆる魔術を受けつけず、反
射してしまうのだ」

そのスキルがあるのも知らずに先代は勇者に大魔術で攻撃し、反射
され自滅したという。

自分の敵に対するリサーチ不足じやないか…とは、流石に言えない。
亡くなつてるしね。

でも、圧倒的な魔力を持つていて過信して足元を掬われたのだろう
という私の認識は間違つていなかつと思う。

「私なら…そんな失敗はない」

「なんだと？」

思わずそんな言葉が口から漏れた。

なにせ魔術が使えないのだから、失敗のしようがない。

それに、私相手では勇者のスキルは無意味だ。

まあ、魔界人だって魔術を使わないようにする事だってできるのだろうけれど、命を懸けた戦闘中なのに魔術に頼るなど言う方が無理なのかもしれない。

暗闇の中うそくと懐中電灯の一つかつがついて、どちらかあげると言わわれたら、誰だって懐中電灯を選ぶ。

わざわざうそくを選ばない。

そういうことなのだろう。

「なるほど。カースさんが能力無しを召喚した理由がわかつたわ」

だとしても、私を選んだ理由は『面白いから』なんだらうな…
格闘技の心得のある男の人を召喚すればもっと簡単に勇者を倒せる
と思うのに。

まあ、チート能力の勇者だからスキルだけじゃなく他の能力もある
のだろうから、そんなに上手いこといくとは思わないけれど。

「…貴殿は、面白いな」

「へ？」

「魔力が無いくせに、魔王になり勇者を倒そつとしているのだろう？」

「そうじやないと元の世界に帰してくれないと脅されてるからです
「貴殿が勇者を倒したら…さぞかし愉快であろうな」
「でしょ？面白うでしょ？」

ニヤニヤするカースさんに頷くアモンさん。
ていうか微妙に私の話聞いてないですね？

「そうだな。面白い。よからず。私も貴殿を魔王と認めよつではな
いか」
「ええ！？」

さつきまであんなに先代先代と言つていたのにアッサリすが。
これだから魔界人は…
まあ、私にとつて都合がいいので今回は許す。

「私は悪魔アモン。貴殿の力にならう。よろしく頼む。魔王殿」

そんな訳でアモンさんが仲間になつた。

勇者登場

ピロピロワーン！

悪魔アモンが仲間になつた！

そんな言葉が脳内に浮かんだ私は立派なゲーム脳だ。
ま、そんなことはどうでもいい。

胡散臭くて全く助けにならない魔法使いのカースさんと梟の頭をし
た悪魔アモンさんを連れて次なる強い魔界人の元へ向かう私、高塚
千里こと魔王様（凡人）。

魔界は廃れている上に暗い空模様。
もともと良くない私の気分は沈む一方だ。

「どうしたの魔王様 元氣ないね！」

「カースさんはとびきり」機嫌ですね…」

「そりやねー！アモンちゃんを仲間にしちゃうなんて流石だよ
「しかし魔王殿。油断されるな。貴殿が面白くない行動をすれば私
はすぐさま殺す」

「これって仲間って言えるの？」

「言えるよ。ねー？アモンちゃん」

「ちゃん付けをするな」

ジユバツ！

ぱい／＼ん！

「な、何今効果音！？」

「私がミスター カースに攻撃をして」

「僕がバリアを張つて防いだんだよ」

ま、全く見えなかつた。

これが俗に言うヤムチャ 視点つてやつね。
・凡人にはついていけません。

「もうすぐで次の魔界人の家だよ」

「次はどんな人なんですか?」

そんな会話をしていたその時、カースさんとアモンさんの表情が変わつた。

そして次の瞬間、カースさんは私に向かつて言葉をかける。

「僕は逃げるから。じゃ、またね」

「え! ? ちょっと! ?」

シユツ!

一瞬でカースさんの姿が消えてなくなる。

あ、あの野郎…

アモンさんは私をかばうように背を向ける。
ああ。アモンさんがいてくれて良かつた…。

「……魔王殿、注意されよ」

「注意?」

「勇者だ」

「! ! ?」

カツン、カツン…

靴音が、どんどん近づいてくる。

同じ世界から来たといつ、この世界で一番強い勇者に出会ってしま
う。

私はドキドキしながら向かってくる人物を見つめた。

カツン、カツン、カツン…

勇者の姿がおぼろげに見えてきた。

中肉中背。武器は何も持っていない。

眼鏡をつけており、服装は制服だった。

…あれ？

あの制服、ウチの高校の制服じゃない？

それに勇者の顔、どこかで見たことあるような？

――――つて、いうか

「須賀君じゃない！？」
「た、高塚さん！？」

勇者と呼ばれたその人は、私のクラスメイトである須賀弘幸君だっ

すが ひろゆき

た。

勇者、動搖する。

須賀弘幸君。

私のクラスメイト。

中肉中背。成績平均。顔も普通。

休み時間では携帯いじってるか、友達とゲームしてるかの行動しかしない、どちらかと言えば地味系眼鏡男子だ。

そんな私と平凡なところが似ている須賀君が勇者？
な、なんだか激しく納得いかない…っ！

須賀君は勇者でチート能力者なのになんて私は能力皆無の魔王なの！？

「須賀君が、勇者なの？本当に？」

「あ…その…」

「私は勇者を見たことがある。間違いないこの男だ」

言いよどむ須賀君の変わりにアモンさんが答える。

私は、守られていたアモンさんの背よりも前に出て須賀君を正面から見る。

須賀君は驚きで目が見開いたままだ。

「どうして高塚さんがここにいるんですか？」

…クラスメイトなんだから敬語なんて使わなくていいの。

まあ、私もクラスの親しくないギャルな女の子にはビビッてしまい、敬語を使いそうになる時はあるけど…私相手に敬語つて…

「私は魔王として、勇者を倒す為に召喚されたの」

「ゆ、勇者？俺のことですか？」

「須賀君が勇者ならそうだよ」

「けど、高塚さんからは何も力を感じないんですけど」

「私には能力一切ないの」

「それでも俺を倒すと？」

「そうじやないと私元の世界に帰れないの」

「大変ですね」

「人事のように言わないで」

「す、すみません」

激しく狼狽する須賀君。

んー…なんだかやりにくい…何この雰囲気…

「私が前に見た勇者とは別人に見えるぞ…」

アモンさんも戸惑っている。

「ーと、そんな時高い声が空から聞こえてきた。

「もーー！ヒロユキー！びひしてその女をさつさと倒さないのー？魔王
なんでしょー？」

「リンクー」

須賀君にリンクーと呼ばれたその子は可愛らしい妖精だった。

うわーすごい本物だ！

ファンタジーな世界に来たつて実感するー！

「いつもみたいに、クールでかつ『いい俺様なヒロユキを見せてよ

！』

「クールでかつ『いい俺様？』

「そうよー！ヒロユキは勇者であり、孤高のヒーローなのよー。『俺と一緒にいると怪我するぜ』といつ台詞がヒロユキほど似合つ人はい

ないわ！」

「」「孤高のヒーローお？」

仲間集めて休み時間にモン ンしてる彼は別人なのかしら？
それに『俺と一緒にいると怪我するぜ』って…
確か須賀君は保険委員だったはずだけど、私の記憶がおかしいのか
しら。

「だ、黙れリンクー！解ったかのよつて俺のことを語るな」

「はい。じめんね、ヒロゴキ」

「フン。悪かつたな、魔王。リンクーはつむさい奴でな」

「あ…そ、そなんだ…」

須賀君…さつきまで私に対しても敬語だったのに…キャラ作ってたの
確かにそのキャラは元の世界での彼を知ってる私相手では恥ずかし
いかも。

「そ、そんなしそつぱい目で俺を見るな、魔王」

「ごめんね、須賀君…須賀君には須賀君の事情があるものね…」

「だからその目はやめろ！」

いやー…しそつぱい目にもなるよ…

私は素でよかつた。本当によかつた。

「魔王殿、私にはさつぱり事情がわからない」

「あーその、須賀君と私はクラスメイトなの」

「そこまでは解るが、何故ああも態度が変わる？」

「人間誰しも仮面を被つて生きてるんですよ…」

「仮面なんてつけていないではないか？」

「比喩です。 - それよりも」

私は須賀君…いや、勇者を見た。

「勇者さん。 私はあなたと話がしたい」

この話し合いですんなり私が元の世界に帰れたりいいんだけど…
そんなに上手い」と話が転がるはずがないのだ。

交渉は決裂する

「話?」

「私は貴方を倒さないと元の世界に帰れないの」

「ああ」

「だから、倒されてくれない? 駄目?」

「だ、駄目です」

「『です』? ヒロユキどうしたの?」

「な、なな、なんでもない。口を挟むなリンクー」

「うん」

違和感あるな…須賀君のこの世界のキャラ…
敬語も困るけどさ。

「先代魔王を倒してようやく得た平穏だ。だが、魔界の残党共はまだ残っている。完璧な平穏じゃない。人間が幸せに暮らせる平和のため、俺はまだ倒されるわけにはいかない」

うーん。やっぱり駄目か。

そりゃそうよね…

「あ。じゃあ、私が魔界側からもサポートするってのはどう? 魔界からも意識を変えるの」

「…それは無理だ」

「そりゃ…?」

「魔界人は野蛮で、人を襲う化け物だ。契約して縛りつけていないと安心できない」

「えー、そりゃ…? それは人間も同じでしょ?」

「何?」

「人間だって、何をしでかすかわかんないわ。魔界人だらうがなんだらうが変わらないわ」

「魔界人と人間が同じ？笑わせるな」

「須賀君は魔界人を縛りつけすぎよ。いつか綻びができるて大変なことになるわよ」

「なりやしない。俺の契約は完璧だ」

「むむむ…つ！」

「……なんだその目は」

私と須賀君の間に剣呑な雰囲気が漂う。
なんなの？分かり合おうとしないその態度。腹立つ。

「須賀君のわからずや」

「お前の方がわからずやだ。魔界人のこと何もわかつてない」

「そりや知らないけど、これから知るのよ」

「……」

「……」

二人の間にバチバチを火花が散る。

アモンさんは「ふむ。このまま和解にいくかと思つて焦つたが、面白くなつてきた」と咳き、リンカーちゃんは「ヒロコキやつちやえー！」と須賀君を応援している。

「やはり、お前と俺は魔王と勇者の関係のよつだな」

「そうみたいね。残念だわ」

「だが、魔王。お前の戦力は低い。俺の圧勝だ」

「そんなこと知つてるわ」

「お前がここに来たのは、後ろにいる悪魔のよつに仲間を見つけるためだろ？」

「ためだろ？」

「…それがどうしたの？」

「そいつが最後の自由な魔界人だ」

「…？」

須賀君は一枚の紙を取り出す。

よくわからない、英語のような文字が書きなぐつてある。

「な！ミノタウルスも契約したのか！？」

アモンさんの丸い目が大きく見開く。

須賀君はくくく、と笑う。

「お前以外の全員の魔界人を契約させた。俺の力でな」

「くそ…勇者め…貴殿の方が、化け物だ」

「俺は勇者だ。正義の味方だ」

いや、今このシーンだけ切り取つてみると須賀君のほうが悪役に見えると思つ…

どうも、須賀君は先代魔王を倒して調子に乗つてるようには見える。

正義にも酔つてもいる。

大いなる力は須賀君を狂わせ、正常な判断ができなくなつてているようだ。

「次はお前だ。悪魔アモン」

「くつ…！」

須賀君は新しい紙切れを取り出し、アモンさんに近寄る。
アモンさんは後ずさることしかできないようだ。

「契約して、罪を償え。一生な」

「待つて」

私は須賀君とアモンさんの中に立ちはだかった。
そして須賀君を正面から見る。

「アモンさんを契約なんかさせない」

「なんだ? 一緒に行動して情でも移つたか?」

「いや。別に」

わざと会つたばかりだし。

情がわくほど時間の時間を共有なんてしてない。

「こんなことしても、償いになんてならないわ」

「なんだと?」

「無理やり契約させて動かすなんて、恨みが生まれるだけよ! たとえアモンさんが人間にひどいことをしてきたのだとしても、きちんと反省して、血の罪を償わせるべきよ!」

「魔王殿…」

「何をしても反省しない人には契約すればいいと思つ。全への余地を与えないのは正義の押し付けよ!」

「押し付けじゃない! 魔界人に話し合ひなんて時間の無駄だからこうするんだ!」

「魔界人と話し合いをしたことがあるの?」

「ない。必要ない」

「……可哀想ね、須賀君

「え」

私は心の底からわざと思つた。
可哀想だ。

いきなりチート能力を手に入れて、勇者って言われて、須賀君はこの世界に振り回されている。

「可哀想に」

「俺は…」

がつ！

戸惑う須賀君を見つめていた私の腰を、前フリも無く捕まれた。その主はアモンさんだ。

「逃げるぞ、魔王殿！」

「え！？」、「逃げる！？」

「私に捕まつていろ」

私ががしつとしがみ付くとアモンさんの姿が一瞬で変形し、大きな鼻の姿になつた。

頭だけじゃなくつて、体全部も鼻の形になつたのだ。そして大空へと飛び立つた。

「ぎ、ぎやああああ――!とん、飛んでる――?」

「叫ばない方がいい。舌をかむぞ」

「わ、私、高所恐怖症なのよ!高いの怖い!」わいこわい――!

「魔王殿、黙れ」

「無理無理無理むりむぎやー!」

舌噛んじやつた

むちやくちや痛い!

「だから言つたのだ」

「……（言葉が出ない）」

「しかし、私以外の魔界人全員が契約されたのか…これは厄介なことになつたな」

「……」

私は、元の世界に戻ることができるのだろうか…？

不安を胸にアモンさんにつかまり、大空の中を私達は進んでいった。

一方、その場にいなかつたが様子をずっと見ていたカースは一人、愉快そうに笑つた。
そして、誰もいないのに言葉を発する。

「さ、どうする？魔王様？仲間はアモンちゃん一人。そして君は能力無し。敵は勇者と人間と契約された魔界人達だよ？どうする？どうする？どうする？」

舞うかのようにカースは一人手を広げ、問いかける。
答えは返つてこないとわかつているのに。

「くれぐれも、諦めたり死んじゃつたりして僕を失望させないでよ
ね？」

RPGのような世界

「話せばわかる、なんてのは綺麗事。そんなのは解ってます。私が言いたいのは話す努力を怠るのはいけないということです」

アモンさんに向かつて私はそう呟いた。

ここは魔界の片隅。死者の泉のほとり。

勇者である須賀君から逃げてきた私達はここで作戦会議をしていたのだ。

アモンさんは「話せば解るという理屈は気に入らない」ということを言わされたので、私は冒頭の答えを切り出したのだ。

「魔界人も人間も基本は同じだと私は思います」

「同じか」

「そもそも、同じ世界の同じ時空にいる生き物なんです。全くの別物なんてのはないんじゃないですかね？」

「なかなかスケールが大きい話をするな、貴殿は」

「そうですか？初めて言われました」

「人間と魔界人は、解り合えるのか？」

「合えたり、合えなかつたりだと思います。アモンさんだつて、嫌いな魔界人と好きな魔界人がいるでしょう？それと同じ。ハードルはちょっと高いでしょうけど」

「貴殿は、魔界人を知らないのにそこまで言うのか」

「変な先入観はないですね。だからありのままに物事を見れますよ」

アモンさんもカースさんも、いい人とは言えないけれど別に人間と

そんなに変わらないように感じる。

喜怒哀楽があり、志向があり、趣味がある。

姿や能力や住む世界が違うだけにしか見えない。

「同じ世界で、しかも言葉が通じるんです。なのに話し合いを怠るなんて怠慢もいいとこです。私はそこに怒ってるんです」

須賀君は完璧に魔界人を悪だと決め付けていた。

自分が正義だと信じきっていた。

それはいけないと思う。

これは勸善懲惡の物語じゃないんだ。

完璧で一方的な正義なんてありえない。

それが私の考えだ。

「なるほどな。魔王殿の考えは理解した。私は人間が好かないが、魔王殿は気に入っている。つまり、そういうことか」

「そう。アモンさんも人間の一人ひとりをもつと知れば好きになる人だつてできますよ。殴りたくなるくらい嫌いな人だつてできると思ふけど」

「ふむ……で、魔王殿。これからどうするのだ?」

「……どうしましよう?」

敵はたくさん。仲間はアモンさんと能力皆無の私。カースさんはどこかに逃げやがるし……どうするよ……

「アモンさんはどのくらい強いんですか?」

とりあえず味方の戦力から知ることにした私。アモンさんは「うーむ」とうなり声をあげる。

「具体的にどれくらい強いかと聞かれても困る」

「えーと、例えば私が何人いればアモンさんに勝てます?」

「何千人いても、負ける気がしない」

さいですか。

そんなに弱いのか私…知つてたけど。

「そもそも、なんの能力も持たないということ自体が稀有だ」「どういうことですか？」

「この世界は皆基本的に何かしらの能力を持っているのだ」

「マジですか」

「ああ。貴殿はそちらへんの通りすがりの人間（非戦闘員）よりも弱い。世界最弱だ」

「せ、世界最弱……！？」

嫌な称号を貰つてしまつた。
いらない…

「みんな魔法使えるんですか？」

「魔法ではなく、魔術だ」

「何が違うんです？」

「私にもよくわからない。そちらへんはミスタークースに聞くとい

い」

「いないんですけど」

「ミスタークースはいつも大切なときにはいないな」

なんという役立たず。

「いや、私ほどじゃないか。

なにせ世界最弱ですから…（いじいじ）なんかジメジメした気分になつてきた。話題を変えよう。

「須賀君はどれくらい強いんですか？スキル以外の能力つてあるん

ですか？」

「勇者の強さか… そういうえば深く検討したことなかつたな… ふむ」

アモンさんは嘴に手を当て、考えるポーズをする。
ていうか、自分の敵の強さを検討したことないって…
人間に負ける事はあまりないから考えない、とかそんな理由っぽい
なあ。

アモンさんは強い悪魔らしいし。

「勇者のスキルも厄介だが、魔術自体もやっかいだ」

「須賀君は魔術も使えるんですか？」

「そうだ。非常に稀ではあるが、勇者はスキルと魔術、どちらも扱
うことができる」

流石チート。

同じ稀である能力皆無の私とは天と地の差。

「しかも、勇者は5つの属性が使えると聞いたことがある」「属性？」

「魔術には使える属性がある。火・水・風・土・雷・光・闇・時…
魔術を使える人間、一人に一つの属性だ」

「へー」

RPGの世界だ…

装備とかアイテムの説明とかあるのだろうか。

「ちなみに私は風だ」

梶ですものね、アモンさん。
納得。

「一人一つしかない属性なのに、須賀君は5つも使えるの？」

「火・水・土・雷・光だと聞いている」

「えー…」

「その上」

「まだあるんですか！？」

「勇者は女性にモテる」

「……は？」

須賀君が女性にモテる？

だから何？

「魔王殿。先ほどの妖精を見たであります」

「リンカーチャンですね。すっごく可愛かったです。そういえば、須賀君のことすごく好きだつて言う感じはしましたね」

「勇者の周りにいる女性はみんなあの状態だ」

「……んん？」

「みな、勇者とある一定時間以上傍にいた女性は勇者に恋をする」

「え？ そんなんですか？」

「ゲームのスキルもあるのではないかと私は推測している」

ゲーム脳の私にはギャルゲ主人公補正のように感じる…

なんというか、いろんな意味で須賀君はこの世界に祝福されてるんだなあ。

「魔王殿も、気をつけられよ。貴殿が勇者に惚れてしまつては全くもつて面白くない」

「はあ… そう言われましても…とにかく、仲間を集めない駄目なことはわかりました」

私とアモンさんだけで須賀君を倒すのは無理そうだ。

仲間がないと。

RPGの世界でもそうだもんね。

「仲間は私以外契約させられた」

「別に仲間は魔界人だけじゃないですよ」

「……」

「人間だって、リンカーちゃんのような妖精や他の種族さんたちも
私達の仲間になりえるんですよ」

RPGの世界もそつだしね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1859p/>

チート主人公はお呼びでないっ！

2010年12月14日09時04分発行